

「老木に花」と「巖に花」

—和歌の用例から—

岩崎雅彦

世阿弥は『風姿花伝』ものまね物理学条々の「老人」の項目で老人の舞の演技について論じ、「花はありて年寄と見ゆるる公案」として「老木に花の咲かんが如し」と記している。以前、和歌における「老木の花」の用例について述べたことがある(『西行桜』の《夜桜》、『鍊仙』平成二十四年四月)。今回は、より『風姿花伝』の記述に近い「老木に花」の用例について見てゆきたい。

平安後期の歌人、源経信(一〇一六〜九七)の『経信集』に、経信と孫娘の贈答歌(十二、十三番)を載せる。

右大弁の姫君の幼きが、歌を好みて、  
雪の降る日、梅花を折りて、おほぼ  
殿にとて、かくありし

梅の花雪にはやされめでたきは  
君が千歳のかざしとぞ見る  
返し

雪降りし老木に花も咲きぬれば  
いとど小松の末ぞゆかしき

詞書の「右大弁」は経信の次男、基綱(俊頼の兄。桂流琵琶の当主)のことで(関根慶子校古典文庫『経信集』解説)、その娘が雪の日に梅花に歌を添えて祖父の経信に贈った。姫君の歌は『古今集』春・上、東三条左大臣源常の

梅の花を折りて詠める  
鶯の笠に縫ふといふ梅の花

折りてかざさむ老い隠るやと

を本歌とする。梅花を挿頭かざしとして髪や冠に挿し、花の持つ生命力を身に付けようという発想の歌である。姫君の歌はこれを踏まえ、降る雪に引き立てられて美しさを増した梅の花を、長寿をもたらす挿頭として経信に贈ると詠んでいる。これに対する経信の返歌は、上の句で花の咲いた梅の老木に雪が降り積もった情景を描く。経信は「雪降りし老木」に頭髮が白くなった老人の意味を重ね、自分自身をなぞらえている。また「老木に花も咲き」には、孫娘から梅花と歌を贈られてうれしがる祖父の心情が表わされている。和歌では老木に花

が咲くとは、老人の心が若やぐことを意味する(岩崎『西行桜』の隠し本説)『鍊仙』平成十一年三月)。下の句では姫君を姫小松に例えて老木と対比させ、その生い先がいっそう楽しみであると述べる。

次に慈円の『拾玉集』(石川一・山本二『拾玉集』明治書院)五二五六番歌を示す。

建久二年、右小弁資実すけみに山本の庄を  
給へたるよし聞きて、祖父の日野の  
民部卿入道の許より、覚玄律師の許  
へ慶ぶよし申すとて、一絶をつかは  
したるを見れば、  
所懐ヲ書シテ子孫ニ呈ス

老沙弥如之

孫枝子葉恩ニ誇ルノ日、枯木自然ニ春ニ  
遇フガ如シ、水菽徒ラニ今詠謝ヲ宜シク  
シ、後榮識ラズ七旬ノ身

これを見て、和してつかはすとて、  
木の下の春に逢ふなる春なれば

老木に花も咲かざらめやは

建久二年(一一九二)に藤原資長すけなが(日野民部卿。当時七十三歳)が子の覚玄律師に七言絶句を贈った。これは資長の孫(覚玄の甥)の資実すけみが山本庄を賜ったことを祝ったもので、これを見せてもらった慈円が漢詩に応和して一首詠んでいる。資長の絶句は、孫が恩賞を受けたことを誇らしく思い、枯木のような自分にも春が訪れたようだ喜び、つたない身で今詩を詠んで謝意を述べ、七十代の自分にこれ以上の榮譽はないと述懐する。慈円は資長

の「枯木自然ニ春ニ遇フガ如シ」を受け、老木に花の咲かぬこともなからうと祝う。孫の栄達を喜ぶ資長の心を、慈円は老木に花も咲くという和歌の表現に変換している。

次に挙げるのは『風雅和歌集』賀の二一八四番歌である。

七十賀しけるに、人々の歌おくりて  
侍りければ、よみ侍りける

祝部成伸

もろ人の祝ふことのは見るをりぞ

老木に花の咲く心ちする

作者の祝部成伸(一〇九九〜一二九二)は日吉社の祢宜惣官で、九十三歳の長寿を保った。七十の賀を行った際、人々が成伸にお祝いの歌を贈った。多くの人から贈られた歌を見た成伸は、老木に花が咲く心地がすると喜んでゐる。以上のように、和歌では「老木に花の咲く」は老人の心が若やぐことを例える。世阿弥はこの言葉を、老人の舞の面白さと年寄りらしさを同時に表現することの例えとして使っている。

世阿弥はまた物学条々の「鬼」の項目で、強く恐ろしい鬼を面白く演じることが「ただ鬼の面白からん嗜み、巖に花の咲かんが如し」と表現している。

『万葉集』一〇五〇番歌、田辺福麻呂の長歌  
「久邇の新京を讀むる歌」に

春されば 岡辺もしじに 巖には 花  
咲きををり あなおもしろ

という一節がある。聖武天皇が一時都を遷し

た恭仁京の景観を描写した中に、春の岡一面に隙間なく花が咲く様子を「巖には花咲き」と詠んでいる。これは岩の周りに花が咲いている状態を表現したものである。

『古今集』冬(三二四番)の紀秋岑

志賀の山越えにて詠める

白雪の所もわかず降りしけば

巖にも咲く花とこそ見れ

は、巖に積った雪を桜の花に見立てたもので、この発想は世阿弥の表現に通じる(川瀬一馬『校注花伝書(風姿花伝)』)。

源俊頼は『俊頼髓脳』で、歌に詠まれる題材

を列挙しているが、その中に、

冬の物は、はじめの雪めづらしく降りて、

巖にも花を咲かせ、

と見える。これは古今集歌の表現を踏まえたものだが、語の並び順としては、こちらの方がより『風姿花伝』に近い。

世阿弥以降の例も挙げると、三條西実隆(二四五五〜一五三七)の『雪玉集』住吉法衆百首(七一八六番)に

散り敷けるさてだにあれな山ざくら

巖にも咲く花とみなさむ

とある。古今集歌を本歌としつつ、本歌では雪を花に見立てているところを、岩に散り敷いた桜花を巖に咲く花と詠んでいる。本歌を踏まえ、それを少しずらしているところに工夫がある。雪を花に見立てるのではなく、散った花を咲いた花に見立てている。物の見立てではなく、言わば状況の見立てである。

『後奈良院御製』永正十年(一五二二)四月の月次御会の歌(五十八番)には

谷残雪

谷ふかみ巖にも咲く花なれや

春きて残る雪の一むら

とある。本歌が降り始めの雪を詠んでいるの

に対し、春の残雪を詠んだところが目新しい。

世阿弥は和歌の「老木に花の咲く」という表現をもとに、文末を「咲かんが如し」という漢文訓読体に変え、「老木に花の咲かんが如し」とした。これは禪の公案の形になぞらえたもので、これを項目の末尾に置くことにより、読む者に強い印象を与える。鬼の項目では「老木に花の咲かんが如し」に対応する形で

「巖に花の咲かんが如し」とした。こちらにも古今集歌以来の表現が反映している。世阿弥は「恐ろしき心と面白きとは、黒白の違ひなり」とし、恐ろしい鬼を面白く演じるのは至難の業であると説く。硬く重い巖は強く恐ろしい鬼の比喻である。現実には巖に花が咲くことはないが、鬼の演技は巖に花を咲かせる

ぐらい難しいのだと世阿弥は主張する。公案はしばしば逆説的なことを課題として提示するが、「巖に花の咲かんが如し」は和歌と公案の表現を融合させたきわめてすぐれた一文と言える。これも老人の場合と同じく項目の末尾に置かれ、強い印象と余韻を残す。両方とも七音、七音で和歌の下の句と同じ構成になっていることも記憶に残りやすい要因であろう。

(國學院大學教授)